



## 新長崎市の史跡探訪塾





塾長 田端 光男

### ■塾長のコメント■

新長崎市の史跡探訪塾は平成 17、18 年に合併した旧 1 市 7 町からなる新長崎市の歴史、史跡などの調査研究が主な活動内容で前年度からスタートいたしました。

前年度は会員 54 名で三和・野母崎・香焼・伊王島・高島の歴史、特にキリシタン・神社仏寺・長崎港の警備・台場・産業遺産等について調査研究を行い、その成果を小冊子『新長崎市の史跡探訪Ⅰ』として発表いたしました。

今年度は会員数 56 名で旧外海町・旧琴海町そして、旧長崎市内で一般市民にあまり知られてなかったと思われる三重・式見・福田・茂木エリアを対象としました。

これらを『新長崎市の史跡探訪Ⅱ』として発表いたしましたのでご高覧くださいようお願いいたします。

前年度の『新長崎市の史跡探訪Ⅰ』につきましてはご高評いただき、また観光関係のみならず、あらゆる分野で有効活用いただいていることで塾生一同大変よろこんでおります。

今年度の『新長崎市の史跡探訪Ⅱ』につきましては目下世界遺産、188 殉教者の列福式、2010 年放送の NHK 大河ドラマ「龍馬伝」主演福山雅治等々長崎ならではの話題も多く、

また当塾に関わるものばかりでありますので多くの方々にご活用いただけるのではと期待いたしております。

このように想定以上の成果をあげることができましたのは、ひとえに長崎歴史文化博物館の原田博二研究所長をはじめ同館スタッフの方々および長崎伝習所事務局の方々、そして現地探訪の折に親切丁寧にご指導・ご協力いただきましたの方々、それから当塾塾生一同の献身的な活動の賜物と心から感謝申し上げます。

なお、この種の活動が長崎学の一環として、新たな観点に立ってさらに継続させていただけるよう塾生一同切望いたしております。



## ■塾の目的■

各エリアの歴史、史跡、文化等を調査研究し、これを1冊の本に纏め、新長崎市の市民に広く伝えることを主な目的としております。

## ■塾の研究・活動内容■

塾活動は、原則として毎月2回の定例会を第2第4金曜日の午後6時から7時30分まで開催しております。

このほか、班毎に定めた日時に現地を訪ね調査研究を実施しました。

市外研修も2回行い、1回目は唐津・伊万里方面、2回目は東彼杵界隈の史跡巡りを実施しました。

それから、有名人の墓地・墓碑の清掃と碑文の調査、長崎学の史跡巡りの下調査と本番時の誘導係等に協力しております。長崎学公開講座などにも極力参加しております。

## ■塾活動の成果■

塾活動の成果についての概要は次の通りです。

### 1. 人的交流

塾生同士は言うまでもなく、現地の方々との交流により友好感が深まりました。

### 2. 再発見

それぞれのエリアには長崎中央地区にはない、独特の歴史や文化などが数多く残っているのを知ることができました。

### 3. 二人三脚

1人では絶対にできなかったであろうことが沢山ありました。たとえばたった1つの碑を調査するにしても、草を刈る人、木を切る人、寸法を測る人、写真を撮る人等々、それぞれの

役割の人々が数多く必要であることを実感できたのも、大きな成果の1つでした。

### 4. 精神的な満足

この活動は正にボランティア活動です。故に活動が終わってからの充足感は何ともいえません。大げさではありますが、世のため人のために少しでもお役に立てたと思えば心身共に健康になります。

その他塾生個々にも各種の成果を沢山得られたことと思います。



## ■提言■

2カ年にわたり、10のエリアについて現地調査をし、その資料と文献等と引き合わせ研究・討論を重ね成果報告として小冊子に纏め発表させていただきました。

この冊子は塾生一同の献身的な汗の結晶であります。できるだけ多くの方々にも有効的に活用していただきたいと願っております。

そのためにも、例えば『広報ながさき』など他の媒体でもとりあげていただければと思います。

## 平成 20 年度 新長崎市の史跡探訪塾 活動報告

平成 20 年

- \* 5月8日(木)開所式・第1回塾活動  
開所式の後、自己紹介、年間活動計画日時など
- \* 5月16日(金)第2回塾活動  
前年度活動概要(宮川)、長崎学について(原田)
- \* 5月25日(日)第3回塾活動  
午前中は掃苔会、午後親睦を兼ねてハタ揚げ大会
- \* 6月13日(金)第4回塾活動  
本年度活動エリアについての打合わせ他
- \* 6月27日(金)第5回塾活動  
前年度活動報告、本年度活動エリアの希望調査
- \* 7月11日(金)第6回塾活動  
各エリアの班長選出、班別活動
- \* 7月21日(金)第1回市外研修  
第1回市外研修(唐津、伊万里方面)
- \* 7月25日(金)第7回塾活動  
熱中症の応急手当法(講師 石橋氏)、班別活動
- \* 8月18日(月)第1回班長会  
前年度の反省事項(班別活動、原稿作成等について)
- \* 8月22日(金)第8回塾活動  
班別活動と原田博二先生のオランダ研修旅行の話
- \* 9月12日(金)第9回塾活動  
九州創発塾鹿児島大会の報告(城田)、班別活動
- \* 9月26日(金)第10回塾活動  
班長会議の報告、班別活動

- \* 10月10日(金)第11回塾活動  
原田博二先生より「寛永長崎港図」についての講座
- \* 10月24日(金)第12回塾活動  
主に班別活動
- \* 11月3日(月)第2回市外研修  
午前中、県地方史研大村大会  
午後、東彼杵史跡探訪
- \* 11月14日(金)第13回塾活動  
第2回伝習所まつり実行委員会報告、班別活動
- \* 11月28日(金)第14回塾活動  
主に班別活動
- \* 12月5日(金)第15回塾活動  
成果報告用原稿と一口メモのお願い、班別活動
- \* 12月19日(金)第16回塾活動  
班別活動

平成 21 年

- \* 1月9日(金)第17回塾活動  
第4回班長会、原田顧問の特別講座、新年会
- \* 1月23日(金)第18回塾活動  
班別活動
- \* 2月6日(金)第19回塾活動  
班別活動
- \* 2月13日(金)第20回塾活動  
班別活動
- \* 2月27日(金)第21回塾活動  
班別活動(伝習所まつりの準備)午前9時より

- \* 3月6日(金)伝習所まつり準備  
班別活動(伝習所まつりの準備)午前9時  
より
- \* 3月7日(土)伝習所まつり  
伝習所まつり本番 10時～、準備 9時～
- \* 3月13日(金)第22回塾活動  
AEDを用いた心肺蘇生法の講習

- \* 3月27日(金)第23回塾活動  
反省会

このほか、不定期に墓地調査、史跡めぐり、公開講座、市外見学、そして、グループごとの現地探訪とその研究を実施した。



上野家墓地清掃を終えて



研究活動状況

## 「旧外海町エリア」

### 1. 旧外海町の概要

旧外海町は、長崎市の北西に位置し、五島を望む角力灘すみづなに面している。この地区の人口は約5千人、面積47平方キロメートル弱である。平成17年に長崎市に編入合併した。市中心部から車で約50分、約40キロの距離にある。かつては、「陸の孤島」とよばれ、厳しい自然環境の中にあったが、道路事情の改善等もあり、市中心部との交通は著しく好転した。

旧外海町は、昭和30年神浦村こうのうらと黒崎村が合併して外海村になり、同35年に町制を施行した。昭和27年から池島炭鉱が開発され、昭和34年に営業出炭を開始し、平成13年の閉山まで操業が行われた。現在は海外から研修生を受け入れ、炭鉱技術を伝えている。

ド・ロ神父の活動の拠点となった出津は、国の重要文化財に指定された「旧出津救助院」をはじめ、ド・ロ神父記念館や出津教会、外海歴史民俗資料館などの文化財が集積し、「出津文化村」とよばれている。昭和53年からド・ロ神父の生地であるフランスのヴォスロール村と姉妹都市提携をし、交流してきた。

また、日本を代表する作家故遠藤周作氏の小説『沈黙』の舞台といわれるゆかりの地であり、平成12年に「遠藤周作文学館」が開館した。

近年その側に「夕陽が丘そとめ」と呼ばれる道の駅もオープンした。

### 2. 神浦城

神浦城は、標高43.4メートルの地の山城で、本丸、二の丸のほか、石垣が遺構として残存している。城は、大串小次郎俊長が永和年間(1375~79)に築城したという。永禄9年(1566)7月大串正俊が大村純忠に背き、後藤貴明に従ったため、純忠に討たれ、神浦城は破

却された。大串正俊(神浦正俊、年代未詳)の子正信(神浦氏8代)は、大村氏の家臣となり、神浦の地頭となった。文禄元年(1592)神浦正房(神浦氏9代)は、朝鮮出兵に従わなかったため、領地を没収され平戸に蟄居した。弟正高(神浦氏10代)は、朝鮮出兵に従軍し、音琴村にて采地200石を受けた。元和元年(1615)神浦正通(神浦氏11代)は、再び神浦村を領した。平成16年3月、外海町教育委員会は、神浦城公園(仮称)整備のため、発掘調査を実施した。



神浦城址

### 3. 神浦氏の墓

延宝元年(1673)創立の、浄土真宗寺院光照寺の本堂の近くに、自然石を利用した3基の墓碑がある。神浦長通、同高茂らの墓とされる。神浦長通は、神浦与太右衛門正通の三男で、幼少のときから藩主純長に近侍して寵愛を受けた。万治元年(1658)16歳で分家し、寛文2年(1662)に家老、400石を給せられた。

### 4. 神浦の寺院

光照寺(浄土真宗)は、寛文13年(1673)神浦光照寺の3世恵秀が京都西本願寺に赴き、了始法王より木仏と寺号の公称を許され、大村の正法寺末寺となった。久本寺(日蓮宗)は、明治5年(1872)信仰の自由を得て、光照寺より分離した。明治16年(1883)「事常山久本寺」

と寺号の公称が許可された。明治 22 年 (1889) に本堂が建立され、明治 25 年 (1892) に完成した。得城寺(日蓮宗)は、明治 28 年(1895)に久本寺より分離(このときの門徒は 160 戸)、明治 31 年(1898)本堂が建立された。明治 44 年(1911)に千葉県香取郡常盤村から寺号を譲り受けて「得城寺」と称するようになった。

## 5. 旧外海町の神社

神浦神社は、寛政 8 年(1796)境内に石垣を築き、安政 4 年(1857)石の鳥居を建立、元治元年(1864)社殿を建立した。当町における一番古い神話として<sup>じんくう</sup>神功皇后の説話が伝承されている。枯松神社は、旧黒崎村にあってギリシタンを祀った神社である。聖ヨハネ一世(サン・ジワン)を祀ったとされ、かくれギリシタンの信仰の対象となっていた。その他旧外海町の主な神社の名前と創立年を列挙する。黒崎天満宮(万治 2 年=1659)、大野神社(寛文 11 年=1671)、柏木神社(延享 3 年=1746)、池島神社(昭和 38 年頃白山比咩神社が道路建設のため壊されるのを契機に、炭鉱の守り神の大山祇神社と合祀して建てられた)、金比羅神社(のち琴平神社と改称、嘉永 5 年=1852)、恵比寿神社(慶安元年=1648)。

## 6. 番所跡・烽火台跡・台場跡

旧外海町エリアには、江戸時代の長崎警備のために、次に示す番所・烽火台・台場があった。(1)神浦小番所跡(寛永13年=1636設置)(2)永田小番所跡(3)池島小番所跡(正保元年=1644設置)(4)大野岳に烽火台設置(文化6年=1808)(5)神浦台場跡(嘉永3年=1850)(6)遠見番所跡(神浦番所から10町ほど南の方にある大野の辻にあったという)

## 7. 池島の炭鉱の歴史

昭和27年三井鉱山の傍系として松島炭坑株式会社により採炭が始まった。同28年池島港—佐世保間を結ぶ定期船が就航、翌29年地方港湾に指定された。同30年に着炭、同34年大島鉱業所として営業出炭を開始した。大島炭鉱は同45年閉山し、同年池島炭坑株式会社を設立、新松島炭坑株式会社池島鉱業所として発足した。昭和60年には、過去最高の153万トンを出炭したが、円高の進行により、海外炭との格差は3倍の開きとなった。同62年、国が「国内炭の段階的縮小」の石炭政策を打ち出した。平成13年池島炭鉱は閉山し、翌年三井松島リソース株式会社が長崎炭鉱技術研修センターを開設し、炭鉱技術海外移転事業を開始した。現在、インドネシアの炭鉱技術研修生を年間40名受け入れている。



池島炭鉱閉山後の風景

## 8. 外海の教会

明治 12 年(1879)黒崎地区はフランス人宣教師ド・ロ神父の司牧地となった外海小教区に含まれ、同 32 年(1899)には同神父が購入していた土地などを造成して教会堂の建設を計画した。同神父が設計にあたり、岩永信平神父の指導による労働奉仕で進められ、大正 7 年(1918)ようやく黒崎教会の着工にこぎつけた。同 9 年(1920)に煉瓦造でロマネスク様

式の教会堂が落成した。屋根は単層・瓦葺で、堂内はバシリカ型・三廊式となっている。

出津教会は、フランス人宣教師ド・ロ神父により明治15年(1882)煉瓦造でロマネスク様式の教会堂として建立された。県指定有形文化財。単層・寄棟造の低い屋根(強風に備えたもの)に、堂内はバシリカ型・三廊式、弓状天井が特徴で、板敷床平面となっている。同24年(1891)祭壇部に塔を建て十字架を置き、同42年(1909)に玄関部を拡張し、鐘塔を建立した。

大野教会は、カトリックの巡回教会。国指定重要文化財。明治12年(1879)主任司祭として着任したフランス人宣教師マルコ・マリ・ド・ロ神父は、同26年(1893)この地に出津の巡回教会として石造教会堂(長崎県最古)を建立した。農家風聖堂のこの教会堂の外壁は粘土に石灰・砂を混ぜるド・ロ壁(ド・ロ神父の技法)によるものである。



大野教会

## 9. ド・ロ神父

本名はマルコ・マリ・ド・ロ。1840年3月26日フランスのノルマンディ地方のヴォスロール村にある貴族の家に生まれた。バイユの神学校を卒業後、パリ外国宣教会に入会した。慶応4年(1868)に来日する際、自分の財産を

現金でもらい受けた。莫大な金額で、日本での神父の事業はほとんどこの私財で賄われた。

28才のとき、石版印刷の技術を伝えるために来日して以来、一度も帰国することなく74才で亡くなるまでの46年間を日本で過ごした。そのうち33年間を神と外海地方の人々に愛と奉仕の心で尽くした。布教のみならず、農業の指導、道德教育、社会福祉や産業開発などさまざまな面で指導した。

## 10. 旧出津救助院(授産場)

国指定重要文化財。明治16年(1883)ド・ロ神父が村人の窮状を救うために私財を投じて設立した授産・福祉施設。木造及び石造二階建て寄棟造で、一階はマカロニやソーメン製造、染色、搾油作業場として、二階は機織り工場や修道女の生活の場や礼拝堂として用いられた。使用された機械器具は、ド・ロ神父がヨーロッパ諸国から一流の物を私財を使い輸入したものだ。この建物が道路に面する一部には、神父独自の工法で築かれた「ド・ロ塀」がある。鰯網工場(現、ド・ロ神父記念館)は明治18年(1885)に建設された。

## 11. 長崎市「遠藤周作文学館」

平成12年5月「外海町立遠藤周作文学館」として開館した。平成17年1月長崎市へ編入合併により「長崎市遠藤周作文学館」へと名称変更した。ご遺族からの寄贈・寄託頂いた遺品・生原稿・蔵書を展示すると共に、遠藤文学に関わる収蔵資料の調査研究、情報発信も行っている。施設には展示室・開架閲覧室の他、ショップや軽喫茶もあり、角力灘をも一望できる。



## 「三重・式見エリア」

### ■三重地区

#### 1. 三重地区の歴史概要

- (1)原始・古代 東上遺跡など各地に縄文・弥生の遺跡や、中世の墓跡も見付かっている。
- (2)中世 建武3年の源景家和与状に、「ミエ・くろさき」の3分の1を深堀時継、3分の2を景家が支配することで和与するとある。元龜元年、イエズス会カラブル神父が来訪し、城主ドン・ロレンソ夫妻ほか多数が受洗する。
- (3)近世 三重村は当初幕府と佐賀藩深堀領の相給。慶長10年(1605)、幕府領が長崎外町と交換に大村藩領となり、両藩の相給となる。大村藩領のなかに佐賀藩領が飛地的にあるのは、文禄・慶長の役に地元土豪で佐賀鍋島氏の指揮下で戦ったものがいたことによるらしい。
- (4)現代 明治4年(1871)、大村藩領は大村県を経て長崎県(彼杵郡)へ。佐賀藩領は佐賀県・伊万里県(高来郡)を経て翌年長崎県に所属、同11年(1878)すべてが西彼杵郡に属した。明治22年(1889)、町村制の三重村となり、行政区として10郷ができる。昭和48年、長崎市に編入合併、郷名は元のまま。昭和55年、郷名を廃止し、10町となる。

#### 2. 三重地区の特色

- (1)位置・地名 西彼杵半島の基部に位置し、京泊、三重、黒崎の3つの入江からなることから、最初「三江」、後に「三重」となる。
- (2)史跡・天然記念物・郷土芸能
- ①栄法山正林寺 創立年月不明、開基は道可。万治3年(1660)西本願寺から寺号等の免許、当初、山下に本堂・庫裏を建立。明和5年(1768)類焼、文化4年(1807)現地に再建、幕府の宗教政策により、大村藩領三重村・陌苅村の領民すべてが檀徒とされる。

②天福寺 佐賀藩深堀領の「隠れキリシタンの里」で知られる東檜山に、深堀菩提寺七世住職天端万琦が、旧教会跡に、末寺として創建。隠れキリシタンの信者は、表向きはその門徒ながら、納戸神を祀り、帳方・水方・間方の組織を確立していた。明治になって信教の自由が認められても、ほとんどが、天福寺への恩義や先祖の供養のため、キリスト教へ復帰しなかった。



天福寺

- ③大村遥拝所 明治18年(1885)、大村藩主の先祖を祀る大村神社を遥拝するため建立され、俗に神様屋敷と呼ばれていた。石祠と松桜を植樹。
- ④三重番所跡 寛永13年(1636)、長崎奉行の命で設置された外海番所十六箇所の一つ。
- ⑤遠見番跡 地名を「遠見番の辻」といい、天保14年(1843)、番屋を新規の造立。
- ⑥三重台場跡 嘉永3年(1850)異国船警備のため、大村藩が建設、石火矢3挺、鉄砲15挺を配備、大砲手付・鉄砲足軽など17人配置。
- ⑦狼煙場跡 御嶽にあり、寛永15年(1638)、三重嶽に松平伊豆守の指図でできたものを、文化7年(1810)、大村藩が再興、天保13年(1842)修理した。
- ⑧三重海岸変成鉱物の産地 東檜山海岸などに露出する緑色岩には、陽起石などの変成鉱物のほか、ヒスイ輝石が含まれている。長崎県指定天然記念物。

◎三重くどき踊 「口説き」の始まりは、元禄時代中国地方の捕鯨船が遭難し、その生存者が大瀬戸町(現・西海市)松島に伝えたといわれる。当地には百数十年前、八兵衛が教え伝えたという。毎年8月14日から3日間、老若男女が夜遅くまで踊る。昭和59年、全国レクリエーション協会に採択され、「お光くどき」がレコードに吹き込まれている。

### 3. キリシタンの概要

#### (1)「隠れキリシタン」と「潜伏キリシタン」

信教が自由な現代でも、弾圧時代のキリスト教を信仰し続けている人々を「カクレキリシタン」という。その中で近代カトリックに復活した人々を「潜伏キリシタン」と呼んで区別されている。しかし、いずれも外部が使用する呼称で、当人達は集落で多少異なるが「むかしキリシタン」等の呼称を使用している。

#### (2) 檜山のキリシタン

檜山の東にある赤岳は、浦上地区の潜伏キリシタン達から「御岳」と呼ばれ、三度そこに登れば、一度ローマに巡礼したことになるとして信仰の対象になっていた。その赤岳を擁する檜山も潜伏キリシタンの集落であったが、東は佐賀藩、西は大村藩に統治されていた。大村藩はキリシタン弾圧に力を入れていたため、西に比べ東檜山は現在でも前述の天福寺の檀家でありつつ、昔ながらの信仰を続けている人が残っている。

### 4. 最近の施設

(1)新長崎漁港(畝刈) 長崎県は、長崎港奥にあった長崎漁港が漁船の大型化で手狭・水深不足になったので、畝刈町への移転計画を立て、昭和48年着工。平成元年、新長崎漁港が開港、泊地や岸壁が日本最大を誇る長崎魚市が

営業を開始した。中心市街地とは西山バイパス・臨港道路で結ばれ、近くに水産加工団地や公私の住宅団地も造成され、現在、人口が旧村時のおよそ3倍、約1万8千人となっている。

(2)三京クリーンランド 長崎市が、不燃ごみ等の埋立て処分地として、昭和58年事業を開始、現在も第2工区で埋立て処分を実施中。分別処理の徹底によってあと約40年は大丈夫という。跡地は当初の農地還元の予定を変更し、市が買収を近々完了する。

(3)さくらの里公園 三京クリーンランドの地元還元施設として、長崎市が、市制百周年記念事業として、昭和59年から着手、平成2年供用開始。染井吉野や八重桜など約8千本の桜が植えられ、大芝生広場、テニスコート、遊戯運動広場などを有する、市内有数の桜の名所になっている。

### 5. まとめ

三重地区は、新長崎漁港の開設以来、広義の外海地域はもとより、長崎市全体域のなかでも最も人口増加が大きく、急激な変貌を遂げている地区である。それだけに、その持つ山海の恵まれた良好な自然環境、カクレキリシタン・外海番所関連史跡などの貴重な歴史遺産そして伝統的に強い住民の連帯意識を、今後とも大切に保存継承しながら、新しい時代にふさわしい町づくり・地域おこしが展開することを願ってやまない。

### ■式見地区

#### 1. 式見地区の概要

式見村の名称は、鎌倉時代から櫛(しきみ)の字を用い、一時期、志幾見の字を用いた文献も見られるが、慶長元年(1696)に式見に改められ、現在に至る。

式見地区は、東は岩屋山、北は八筈岳、南は舞岳などの山地に囲まれ、西は角力灘に面する。

昭和 37 年 1 月、式見村は長崎市に編入され、昭和 46 年 2 月に土地の名称変更により、式見町、迎町、園田町、牧野町、四杖町、相川町、見崎町に細分された。

編入当時の式見村は人口約 8,000 人、世帯数 1,400 戸、面積は約 9.3 平方キロメートルで、漁業を主体としていた。

この地方の特筆すべきものは、明治 28 年 (1895) から式見くんちの出し物となった「女相撲」、消防庁長官から表彰された「婦人消防クラブ」、また、「式見かまぼこ」は有名である。

## 2. 乙宮神社

乙宮神社の創立年代は不明である。昔は神楽島飯盛岳に鎮座していた由(現在、旧跡あり)その後いつの頃か当村矢筈岳に遷座し、これより矢筈権現と改称する。

この矢筈岳の中腹に「岳の馬場」という地名がある。これは昔、神事の時流鏑馬(やぶさめ)を射た所の由、当時の祭日は 9 月 9 日で、9 月 7 日矢筈岳より塩屋の辻という所へ神輿がお下りになり、お旅所は千切嶋の側にあって、満潮時は渡海できず、潮の干加減によってお旅所へ臨幸したという。

天正 2 年(1574)矢筈岳より千切嶋に遷座し、乙宮大権現と改称したが、明治元年に乙宮神社と改称し郷社となる。

現在の社殿は昭和 15 年 7 月に改築した。



乙宮神社

## 3. 式見くんち

乙宮神社の例祭が「式見くんち」と呼ばれている。毎年 10 月 29 日にこの地区の 16 カ町が 8 年に 2 カ町ずつ輪番制で奉納踊りを出している。持ち回りの出し物の中には「女相撲」、「ヘラヘラ踊り」、「陸上女ペーロン」などユニークなものも多く、威勢のいい「コッコデショ」なども人気。「式見女相撲」は、化粧回しをつけた女力士たちが「いっちょな踊り」、「相撲取踊り」のあと土俵入りなどを披露する。コッコデショは、寛政 8 年(1796)頃、泉州堺の船が風波を避けて式見の港に避難したとき、里地区の若者が、船頭水夫から教えを受けて雨ごいのために出したのが始まりと伝える。

その他の主な奉納踊りは、「式見木場浮立」「相川町月の輪太鼓」「俵藤太の百足退治」「安珍清姫」「鍬踊獅子舞」などがある川町月の輪太鼓「俵藤太の百足退治」「安珍清姫」「鍬踊獅子舞」などがある。

## 4. あぐりの丘

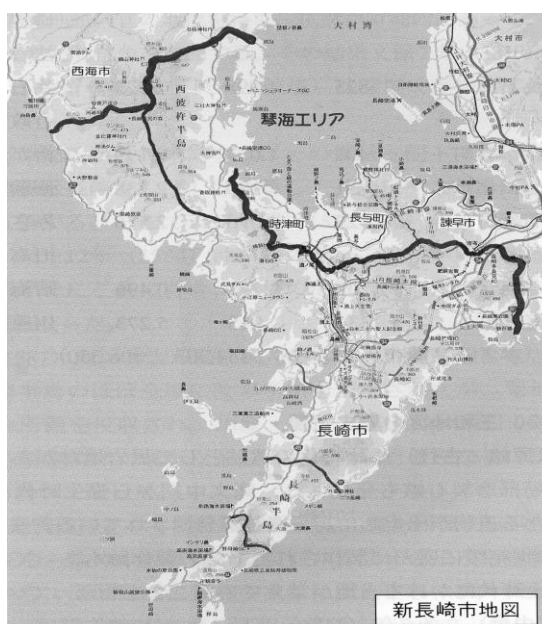
長崎市の北西部に位置し、自然に包まれた農業公園型レジャー施設。平成 10 年 7 月にオープンし、園内はヨーロッパの農村をイメージした 6 つのエリアに分かれている。

青空市場や売店がある「門のエリア」、農園や花畑がある「畑のエリア」、休憩所や売店がある「街のエリア」、パターゴルフなどの遊具が揃った「憩のエリア」、パン作りなど料理体験教室がある「村のエリア」、乗馬体験や動物ふれあい広場がある「牧のエリア」と、老若男女が楽しめるスポットが詰まっている。

## 「琴海エリア」

琴海エリアは、昭和 34 年村松村(子々川郷は時津町へ編入)と長浦村が合併し、琴海村として発足した。昭和 44 年町制施行により琴海町となる。平成 18 年 1 月 4 日長崎市と合併面積 68 平方キロメートル、合併時の人口約 13,000 人。

主な産業はミカン、スイカなどの園芸作物



の農業が中心、大村湾ではナマコ、牡蠣などの漁獲と真珠の養殖などがある。昭和 40 年代以降、長崎市のベッドタウン化し、琴海ニュータウンなど団地が造成され、また、海岸半島部は相次いでゴルフ場が造られた。琴海エリアの歴史は対岸の大村領主大村氏を抜きにしては語ることはできない。当エリアが大村氏の支配下に入ったのは、キリシタン大名大村純忠の時代とされている。それまでは各地域は独立し各有力土豪による割拠体制が敷かれ、各地に山城が存在していたが、大村純忠により西彼半島は服属化されていった。

江戸期には大村藩の領地として支配されてきた。『大村郷付記』によれば、慶長 10 年(1605)大村藩 48 カ村当時は、琴海エリアは形上村、長浦村、西海村の 3 カ村であった

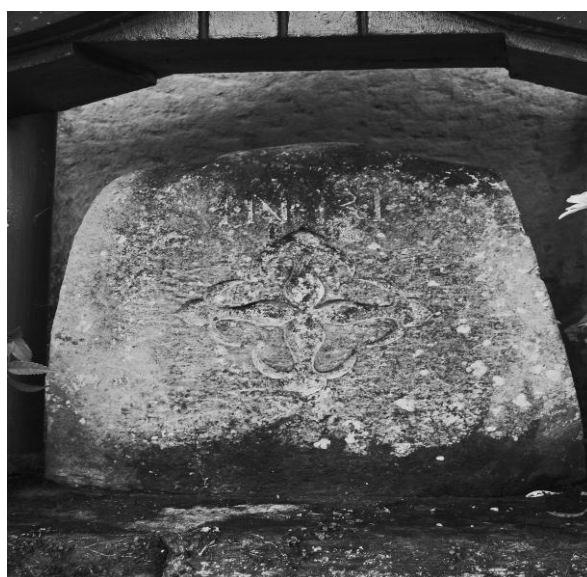
が、明治 4 年(1871)、長浦村、村松村の成立となる。

## 形上発掘のキリシタン墓碑(県指定史跡)

現在地 西海市西彼町平原(エリア外)

キリシタン墓碑発掘場所 長崎市琴海形上町

国道 206 号線を長崎市より行くと白似田バス停から左折し細い道を 800 メートル程進むと、左側の方向に大木の生えた小高い丘が所在地である。



形状 自然石立碑

寸法

高 53.5 センチメートル

幅 42.0 センチメートル

厚 23.0 センチメートル

石質 緑泥片岩

紋様 花十字(縦 26 センチメートル、  
横 26 センチメートル)

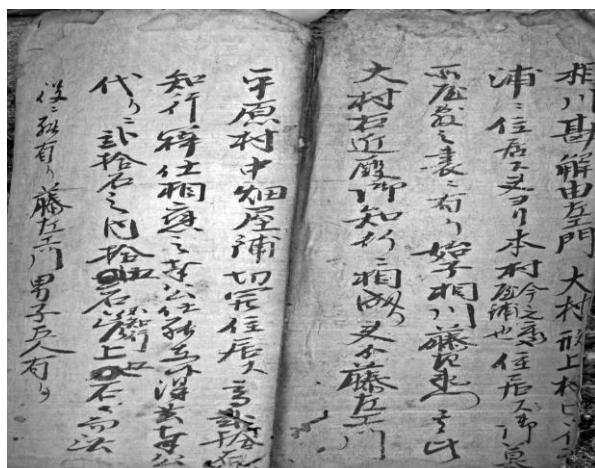
銘 I N R I

「花十字」は、聖母マリアを象徴する白ゆりの花を形にした美しいデザインとなっている。切支丹墓碑にある紋様中、最も美しく完全なものである。

「I N R I」は、Iesus Nazarenus, Rex Iudaeram(ユダヤびとの王、ナザレのイエス)の頭文字をとったもの。「I N R I」を刻んだ

碑は、長崎県では他に波佐見町に、九州では大分県の直入町、野津町、国見町にあり、貴重な史跡である。

この墓碑は、この平原を開拓した相川一族の先祖である相川勘解由左衛門藤原義武のものとする。相川勘解由は、大村藩家老松浦家家臣で、形上一帯を支配した武将であった。豊臣秀吉の最初の朝鮮出兵・文禄の役には一軍の将として出陣し手柄を立てるが、流れ矢に当たって深手を負い、晩年は形上(現形上小学校一帯)で療養、慶長17年(1612)に没している。2代目相川藤左衛門によって形上の屋敷裏に花十字紋 I N R I の墓碑が立てられた。相川藤左衛門は、大村藩主大村喜前から100石を供されていたが秀吉の2度目の朝鮮出兵慶長の役に出兵しなかったことから采地を縮小されて松浦氏より平原移住を強制され100石分の山地を開拓し、采地20石となった。4代目相川甚平が形上に先祖の墓があることを知って代々祀っていたが、明治28年頃現在地に移した。この碑の後の碑は高さ約2メートルあるが、一説では柩の蓋石であるといわれ、裏側には慶長18年(1613)と銘記されている。この2基は県指定史跡となっている。この丘の向い側山の右手の墓地には、相川勘解由の子藤左衛門の墓があり、その石祠の扉の内側に花十字が刻んである。



### 形上舞岳城跡(長崎市琴海形上町)

舞岳城は、琴海形上町の形上及び大江両地区のやや形上寄りに位置し、その市街地区に接する西北部の後背地であって、市立琴海病院前の国道206号から500メートル西北西、ほぼ南北に伸びる標高126メートルの丘陵上に築かれていた。その地の南北をそれぞれ形上湾に注ぐ大江川及び四戸川によって遮られ、西側の外海方面からは標高400メートル級の西彼杵半島の脊梁山脈によって遮られている。城跡一帯を地元では「城の辻」及び「城の平」と呼称し、その存在が知られている。舞岳城の遺構は丘陵の山頂部一帯を占め、戦国期の城郭としては、防御に必要な兵員から考えても、格好の場所に築城がなされたものである。主郭部は、丘陵の地形に沿って「く」の字の形に西に細長く折れ曲がった東西20～30メートル、南北120メートル程度の曲輪から成っている。その主郭部に接するように、南側に接する腰曲輪と思われる方形の副郭部があり、比較的容易に確認できる良好な遺構の状態を保っている。副郭は東西概略20メートル、南北40メートル(歩測)程度の矩形を有し、副郭内の地面からは0.5メートル位の高さで、石垣外側の地面からは1.5～1.8メートル程度の高さの結晶片岩の板状の自然石による野面積みの石垣によって囲まれている。『大村郷村記』にも記述があるが、



大手と考えられる南側稜線に沿って、尾根伝いの各所に結晶片岩らしい自然石の野面積み石塁が築かれている。これは細長い地形を階段状に削平されている。この地域の豪族が築いた城郭としては、実に優れたものである。江戸時代後期に書かれた大村藩の公式記録として価値の高い資料で知られる『大村郷村記』によると、形上村に遺る古城址として舞岳城に関する記録がある。それによると、「舞岳の古城、庄屋門より亥(北北西)の方、五町(545メートル)余の処にあり、高さ麓より登り2町30間(273メートル)、頂上東西12間(21メートル)南北1町(109メートル)、今は野畠なり。乾の方(北北西)石垣築き立て、腰曲輪の形あり。艮(東北)の方絶壁、巽(南東)の方石垣あり、南の方大手とみへたり。」の記述があり、現状とほぼ一致している。『大村郷村記』形上村の項に「元禄の記に、この城に相川知仙と云う者籠り、喜々津主殿と云う者と<sup>せめあう</sup>迫合、右時代取合の様子不分明と云々」の記述がある。この相川氏については、もともと、形上村庄屋敷内にあつて後に平原地区に移された花十字切支丹墓地を築いた先祖にあたる在地の豪族であるが、一方、喜々津氏については、『大村郷村記』大村家旧領のことの項に、「天正の始め大村丹後守純忠入道理専代に、藤津郡中<sup>あまつさ</sup>刺へ彼杵郡内所々龍造寺山城守隆信に掠め取らる」との記述がある。さらに、「喜々津村、矢上村、深堀村、(以下略)天正の始め、右五箇村の地頭等純忠に反して、龍造寺山城守隆信に属す、爾後今に至て佐賀領たり」との記述がある。当時、伊佐早にあつて有馬領と大村領との間を支配していた西郷純堯も領主の座を追われ、龍造寺隆信に屈し、純堯長子信尚(純尚)に換えられている。後には純忠でさえ隠居を余儀なくされ、嫡子喜前

に替わっている。これらの事情から大村純忠に属した在地の土豪相川知仙と龍造寺、西郷勢に属した喜々津主殿との間で、大村灣を挟んだ合戦が繰り返されたものではないかとされている。大村純忠が横瀬浦で洗礼を受け、日本最初のキリシタン大名となる直前から天文、弘治、永禄、元亀、天正の(1530~1590年)凡そ60年間位実戦に使用された。主郭跡には江戸期に郷中守護神として毘沙門天の石祠あり、「宝暦9年5月奉寄進石灯笼 願主中村定右衛門」が側面に刻まれている。

## 「茂木エリア」

### 1. 茂木町の概要と沿革

茂木と言えば活魚料理で有名な茂木町のことだけを想像される方が多いと思うが、茂木が長崎市に編入される以前は、茂木村と称し現在の茂木町・北浦町・飯香浦町・太田尾町・田手原町・早坂町・田上町・宮摺町・大崎町・千々町の10町をまとめて大きな村であった。総面積約34.30平方キロメートル、平成20年7月末現在の人口12,432人の南北に細長く、山の幸と海の幸に恵まれ、また歴史豊かな町である。



#### ①茂木の由来と古代

その昔、茂木は入江で家数も少ない名も無い浦だった。神功皇后が三韓出兵の途中、この地に立ち寄り裳を着けたとの故事から裳着の地名が起ったが、いつのときよりか人々の読みやすいように茂木と呼ばれるようになったとか、他にもいろいろの伝説がある。旧田上名、茂木本郷名には縄文時代の遺物、また玉台寺境内、千々名から弥生時代の遺物が出土しているので文化面では古くから中国、朝鮮の影響を受けていたことがわかる。

#### ②中世

大村領となる。正暦5年(994)大村直澄領となっている。大村直澄は、天慶3年(940)伊予大洲に生まれ、河野七郎とっていた。直純は、40年間大洲の山中に隠れていたが、時の朱雀天皇の赦しを受け純友の霊を慰められ、一族のものをあわれみ給い直澄を従五位下遠江権守任じ、肥前国藤津、彼杵、高来(茂木)の三郡を賜り、大村玖原に居を構え玖原城とし大村の姓をとえ、茂木は天正7年(1579)迄の580年間大村領であった。

#### ③教会に寄進

a 18代大村純忠は、天正8年(1580)竜造寺隆信の接收を恐れ領地の内長崎と茂木をイエズス会に寄進した。8年間茂木と長崎は日本の支配地でなくイエズス会の支配下に置かれていた。

b 豊臣秀吉は、天正18年(1587)イエズス会より没収し直轄領とする。

#### ④江戸時代

a 慶長10年(1605)頃、島原藩領となる。

b 寛文9年(1669)茂木は島原藩領を外され、天領として、以後約二百余年長崎奉行の統治下にあった。

#### ⑤近世

a 明治5年(1872)庄屋が廃止され、長崎県高来郡第2区7小区に編入され、戸長役場が置かれた。

b 明治12年(1879)、西彼杵郡茂木村となる。

c 大正8年(1919)茂木町となる。

d 昭和37年(1962)に長崎市に編入される。

## 2. 交通

### ①茂木街道



『長崎名勝図絵』によると、茂木街道は茂木口といわれ、長崎の要路6道の1つに数えられ、それによると「長崎の南、田上峠から東南に茂木浦口、天草に至る」とある。

### ②長崎茂木鉄道(株式会社)

茂木淵頭を起点として茂木、長崎間の鉄道敷設が計画され、大正10年(1921)9月19日に茂木鉄道株式会社が設立された。大正12年(1923)より堀切の工事と並行して海岸埋め立てが行われ、茂木、北浦間の交通路は完成したが鉄道開通までには至らなかった。

### ③長崎茂木乗合自動車株式会社

長崎バスは、昭和11年4月28日長崎茂木乗合自動車株式会社として創業開始した。鍛冶屋町から茂木本郷間の8.1キロメートルを走った。

## 3. 産業



天保年間(1840年頃)中国から長崎港に來航した唐船で、枇杷の大果品種の種子(唐びわ)が持ち込まれ、長崎代官にいくらかの枇杷が贈られた。たまたま女中奉公をしていた三浦シヲは、その種をもらいうけ、甥の山口権

之助に贈り木場の屋敷の一隅にその種子をまいたのが、枇杷の原木ができたと称されている。現在、他の果樹栽培も盛んになりつつあるが、まだまだ全国シェアの4割を産出する枇杷の大産地である。特産品としての地位は高い。また最近には枇杷を加工した枇杷ゼリーが全国的に知れわたるようになった。

## 4. 名所・旧蹟等

### (1)飯香浦地藏まつり飾りそうめん、太田尾地藏まつり飾りそうめん

(市指定無形民俗文化財)



飯香浦地区にある成尾地藏堂は、天文2年(1533)の創立といわれ、別名汗かき地藏、子安地藏と呼ばれている。医療技術のなかった時代、無病息災、五穀豊穰を祈願したもので、現在でも、地区の守り本尊として親しまれている。祭りは、毎年7月23~24日に行われる。飾りそうめんの技術は、おそらく江戸時代中期ごろ開始されたと考えられるが、飯香浦に伝承するこの技術は、全国的にみても複雑な工程を経て編み上げているものに属する。ここの場合幔幕と鎧兜一対を製作するが、幔幕は1本の棒にリリアン編みの様式で編み上げる。また隣町の太田尾町にも同じ様な飾りそうめん祭があり、こちらはそうめんひとかたで人形を編んでいくのが特徴である。

### (2)北浦のとうら俵かたげ及び獅子踊り

(市指定無形民俗文化財)

茂木地区北浦町に伝わる。俵を担ぎ円形を作りながら俵を山と積み上げ、庄屋の検問を



受ける場面をユーモラスに表現している。この踊りは氏神様の大山祇神社に感謝の豊年踊りとして古くから伝承されてきたものである。五穀豊穡と悪疫退散祈願の奉納踊りとして受けつがれたものである。

### (3) 竈<sup>かまど</sup>神社の大クス、太田尾の大クス (市指定天然記念物)

宮摺に、寛永3年(1626)創建の竈<sup>かまど</sup>神社があり、神社の境内の高い石段の上、拝殿の近くにそびえている。本県屈指のクスの巨樹である。太田尾町のオオクスは所有者宅の雑木林の中にそびえている。球状の樹冠が見事である。

### (4) 宮摺山<sup>みやざう</sup>神の社叢<sup>しゃそう</sup>(市指定天然記念物)

山<sup>みやざう</sup>神とは、文字通り山を守り、山をつかさどる神で、祭神は大山祇神である。宮摺の上方、天草灘を見下ろす山の斜面にある

### (5) 茂木植物化石層(県指定天然記念物)

茂木植物化石群は、スウェーデンの科学者ノルデンショルトが明治12年(1879)10月21日、長崎に探検船ベガ号で寄港し7日間滞在の折りに、この植物化石を多量に採集し本国に持参しスウェーデンのストックホルムとウプサラ大学に保管。鑑定した約50種を報告。茂木植物化石群の植物構成は、中部～西日本の標高300～800メートル級の森林層に相当するといわれる。茂木植物化石層は科学的調査から地質学的価値と新生代第三期鮮新世紀末の植物化石として世界に知られることになった。

### (6) 田上寺(浄土宗・松原山光岳院田上寺)

正平9年(1354)建。一僧が光岳院皆行庵として開創したと伝えられる。家康公をはじめ歴代将軍の位牌を祀り、葵の紋や浄土宗の宗紋を持つ格式が高い寺である。

### (7) 玉台寺(浄土宗・松尾山 無量院玉台寺)

玉台寺は、寛永11年(1634)長崎大音寺開祖伝譽が開創、しばらくは日見村養国寺の嶺山が兼帯していたが、長崎の三宝寺に滞在していた唐津の僧宝譽を招き開基(初代)住職とした。

### ●島原大變の供養塔

島原大變で茂木に漂着した死者は、山門外側に埋葬されている。島原、熊本以外の茂木の地に供養塔があるのは、あまり知られていないので、興味を惹かれるところである。

### ●長尾安右衛門尉の墓

長尾安右衛門尉は、当時、島原領であった茂木地方のキリシタン撲滅の命を藩主高力摂津守から受け功績をあげている。その死にあたり摂津守は、安右衛門尉の労をねぎらうとともに墓を壮大にして威を示したといわれている。

### (8) 裳着<sup>もぎ</sup>神社

裳着神社の由来は、神功皇后が三韓征伐の折、この地に立ち寄り、裳を着替えられたところから裳着という地名が起り、その後創建されたと伝えられている。江戸時代は八武者大権現と称したが、明治元年(1868)裳着神社と改称された。現在の社殿は明治8年(1876)に造営されたもので、正殿四方の欄間に牡丹、雲竜、鯉、金鶏等の籠彫はすこぶる精巧なでき栄えである。境内には「裳着神社祈念碑」垣内の左中央に裳着神社の特別信奉者で茂木ホテルの創業者「稻佐おえい」と「道永えい」の名が記されている。

### まとめ

私達は、今回茂木地区の調査研究をし、知っているようで間違っていて理解していたところもあった。本の制作に当たり、現在・後世の人達へ少しでも長崎市の茂木地区を理解して頂ければと思う。

## 「福田エリア」

### “史跡が語る福田浦ロマン”

#### 1. はじめに

福田村が日本史の中でその史実として登場するのは、永禄8年(1565)ポルトガル船の入港にともなう福田浦の開港のときである。

福田は、鎌倉時代以降、福田氏が支配し、戦国時代末期の兼次、忠兼父子のときには大村氏の家臣として重きをなした。



17代兼次は、永禄6年(1563)大村純忠、長崎甚左衛門とともに横瀬浦の教会で受洗、わが国最初のキリシタン大名の家臣となった。福田は、この地方におけるキリスト教の中心で、永禄11年(1568)には1,200人もキリシタンがいたと報告されている。

長崎開港までの5年間、貿易はもちろん、キリスト教布教、教会の建設、そして大村純忠、修道士アルメイダなど歴史上の人物たちが闊歩した町である。謎に包まれたこの町は、江戸時代、大村藩の役所ともいべき大番所、遠見番所、船囀場、台場(砲台)、横目役所や問役所等が設置されていた。

福田村は、江戸幕府の鎖国政策あるいはキリシタン禁教政策に応じた対応を余儀なくされ、そこにおける村民の生活や武士の生活など史跡や民話が多く残されている。

今「福田」は、ベッドタウンとして大型マンションや大型ショッピングセンターが並ぶ“安らぎの空間”となっているが、史跡が語る福田浦のロマンが隠されているのである。

#### 2. 福田氏

「福田」は、古くは肥前国彼杵郡彼杵荘に属し、初めは<sup>おいて</sup>老手村と呼ばれていた。治承4年(1180)福田氏の始祖となる平兼盛が定使職に任せられ、文治2年(1186)兼盛の子兼定(隈平太)が老手・手隈(現在の福田村)地頭職に任せられた。

福田氏は、平安時代の後期から、江戸時代の後期に改易されるまでの約630年間、福田を治めた。

#### 3. ポルトガル貿易と福田浦の開港

##### (1)ポルトガル船の福田入港まで

天文19年(1550)ポルトガル船が平戸港に入港した。永禄4年(1561)「宮ノ前事件」が起きると、永禄6年(1563)6月、ポルトガル船が横瀬浦入港。

大村純忠の受洗と政策に不満をいただいていた大村家の重臣が武雄の後藤貴明を擁してクーデターをおこす(横瀬浦焼き打ち事件)。

##### (2)貿易港福田



福田浦の開港は、永禄8年(1565)ポルトガル船の入港から始まる。横瀬浦港が焼き払われ、港として使うことができなくなった。すでに大村純忠の勢力下にあった福田領主の兼次に対して、ポルトガル貿易のもたらす経済的、軍事的利益を説いて開港に同意させた。

兼次は、当時すでにキリシタンの洗礼を受け入信しており、ポルトガル人が元々良港ともいえないこの地を新貿易港に選んだのは、兼次がキリシタンであり、なにかと好都合であると判断したからである。

### (3) 福田浦海戦

福田浦をポルトガル船の貿易港としたことで、平戸領主の隆信は激怒し、平戸の軍勢をもって福田浦に入港中のポルトガル船を襲撃するという福田浦の海戦がおきた。突然の襲撃に最初は苦戦をしいられたポルトガル船だったが、大砲が威力を發揮し、松浦軍を退去させた。

しかし、貿易港は口之津(南島原市)、そして長崎へと移っていく。

### (4) 福田での布教

福田浦開港によるポルトガル船の入港が大きく関わり、さらには、福田の領主であった福田兼次がすでに洗礼を受けていたことによってその領民においてもキリシタンになるものが増えた。そして、元龜元年(1570)、布教長のカブラル神父らが戸町、手熊、式見、三重、神浦などの海岸沿いを布教した。戸町、福田、手熊のキリシタンは 1,200 人にも達した。とある。

## 4. 史跡



### (1) だんどの墓



漢字では、「段遠」と書く。源平の戦いで亡くなった平家の死

者をここや崎山に祀っている。

### (2) 福田村の古城址



現在の福田支所の背後に、標高 74メートル余の祐徳院の山があり、そ

の山頂近くを平らに削り取り、本丸がつくられ、福田湾が一望できる山城である。港に向かって大手門が造られ、麓から大手門に至る大手口には掘り切りらしきものもある。鎌倉時代以来の在地領主福田氏の居城であった。

### (3) 小浦波止場



文化 4 年(1807)ロシア人によるエトロフ事件、文化 5 年(1808)には英艦フェートン号

事件があって、長崎港内外の警備がより強化された。このため大村藩は、外国船に対する備えとして文化 6 年(1809) 小浦《現在の小浦船津公園近く)に石垣を巡らした堅固な船溜場を築いた。

### (4) 田子島台場跡



嘉永 6 年(1853)ロシアの東洋艦隊の長崎入港や翌年には、イギリスの東インド艦隊が入港するなど

長崎港周辺の警備体制はさらに厳しさを増してきた。

大村藩は、安政 2 年(1855)田子島(現在の福田小学校・千本松原附近)に台場を築き、藩士を常駐させ沿岸警備に当たらせた。

当時、大村藩では、最新の台場といわれ一の台場から四の台場まであった。

### (5) 琴爪の墓

「島原大變」といわれる大噴火が起こった。そ



の噴火の直後にさらに大津波が島原を襲い、島原城下の大半が

津波に呑み込まれた。それから数日立った月夜の  
こと何処からともなく琴の音がしてきた。そ  
の琴の音は、琴爪をした娘の水死体を葬った墓  
の方向から聞こえてきていた。そのため村人は、  
いつしかその墓を「琴爪の墓」あるいは「琴姫  
の墓」と呼ぶようになったという。

### (6) 西光寺

明暦3年(1657)大村において隠れキリシ  
タンが発覚し、藩の取り潰しを恐れた大村藩で  
は、捕らえたキリシタンを処刑すると共に早急  
に踏み絵をさせるなどして改宗させ、さらには



領内に寺院を建立し  
て神仏の信仰を強制  
した。結果、藩の取り  
潰しは免れたが、西光  
寺もこうした時代の

流れの中で建立された。真宗の本寺は大村市の  
正法寺である。

### (7) ジャシュウモンガシラ



教会跡と伝えられる



現在

天満宮下の畑地は、古寺の跡で、大正5年  
(1916)頃の県道道路工事前には椿の老樹が  
あり、ここに寺の門があったのを土地の人は  
「ジャシュウモン」とか「ジャシュウモンガシ  
ラ」と呼んでいたという。邪宗門頭とはキリシ  
タン宗門のことで、又の名を大音寺跡ともいわ  
れている。そして、この場所は福田教会の跡で  
はないかと伝えられている。

### (8) 天満神社



創立年号不明、寛  
永12年(1635)  
田子の島に中野  
兵五佐江門尉茂  
明再興す。「天満

宮が現在地に移されたのは、天和元年(1681)  
のことで旧社地を天満宮元屋敷と称し、付近の  
林を「宮林」という」とある。

### (9) その他史跡

異国警備に伴う兵士等の飲料水としてオロ  
シャ井戸と異人井戸、津波よけとして千本松原、  
温泉場の金水温泉、等があり史跡めぐりの興味  
は尽きない。

## 5. おわりに

以上述べたように、福田は長崎開港前の貿易  
拠点であり、キリシタンへの対応、長崎港の警  
護など史跡は多く、領民への支配と規制など往  
時の生活も資料として残っているのでこの研  
究はまさに史跡が語る福田浦であった。また、  
長崎さるくの一助となれば幸いである。  
詳しくは長崎史跡探訪塾の報告書をご覧頂き  
たい。

### 「参考文献」

福田村郷土史、福田あたり、フロイス日本史、  
福田地区史跡めぐり、大村純忠など

### 「グループ」

天野一朗、井手勝摩、大木司郎、白地弘奈、  
長門ヤス子、細川敏明、三丸正紀、宮崎健  
宮田一美

## 一言コメント

- 天野 一朗 職員の方々と現地調査で、発見と楽しい活動でした。
- 石橋 久美子 二年間が早く感じられました。成果本が楽しみです。
- 石橋 義孝 和気あいあいと楽しかった班別活動・現地調査！
- 泉屋 郁夫 健康第一。
- 井手 勝摩 新しく長崎市に合併した町を見直しい勉強になった。
- 衛藤 毅 長崎海軍伝習所を最初にこの塾に参加して4年です。
- 大木 司郎 史跡をたずねて2年間楽しい思い出ができました。
- 小方 みどり 楽しい集まりでした。
- 鞍田屋 紘司 史跡探訪塾が楽しく学べてよかったぁと思いました。
- 小嶺 昭典 合併後の歴史文化を調査、新たな発見があり、楽しい。
- 桜井 蓉子 秋日和腰郭埋もれる舞岳城跡 戸根の里銀杏落ち葉の社詣で
- 白地 和幸 史跡の発見は奥が深い。でも皆様の後ろを歩み学び行く。
- 白地 弘奈 私の様な初心者でも快く受け入れてくださいました。
- 城田 征義 新しく合併した所には埋もれた史跡がまだあるようだ。
- 田端 光男 塾長を体験させて頂き人の情けが身に染み入りました。
- 富永 緑 楽しく史跡を巡り勉強させていただきました。
- 朝長 初巳 史跡探訪で訪れた土地の人の故郷を愛する気持ちに感激。
- 永田 たくみ 地元長崎の多様性と多重性を再発見できました。
- 長門 ヤス子 今回の福田、知らなかったことばかり、勉強になりました。
- 西本 浜路 馴染みはあるが知らなかった茂木のことを調べています。
- 原口 和代 あの人も、この人も、みんなちがって、みんないい。
- 日宇 孝良 池島や次兵衛岩など外海の史跡巡りができよかった。
- 平山 次男 野母崎エリア琴海エリアとメンバーの親睦が一番 UP。
- 藤田 孝 原田先生と楽しい先輩の皆様。財産がまたふえました。
- 藤田 祐子 いろんな所、いろんな人達との出会いに感謝！感謝！
- 藤丸 清子 茂木地区の史跡巡りで別の再発見もあり皆様に感謝。
- 細川 敏明 歴史探訪塾捜せば捜す程、新しい発見ができるかも!!
- 松本 淳美 神浦、出津、池島の史跡探訪めぐりは楽しかった。
- 松本 育子 足もとの歴史に興味がわき歩いてみたくなった。
- 眞野 正行 一つの歴史の中に、奥深さとおもしろさを再発見！
- 三ヶ島 正彦 市外研修等楽しく充実した一年でした。
- 三丸 正紀 高島も福田も新しい発見ばかり、楽しい2年間。謝謝。
- 宮川 雅一 沢山の皆さんが最後まで熱心に参加されて嬉しかった。
- 宮崎 健 福田遊廓については資料が殆ど無くて…。
- 宮田 一美 いつも楽しく参加させて頂いております。
- 村崎 春樹 今まで知らなかった史跡、歴史を再発見できました。
- 八木 久雄 歴史好きの皆さんとお話しでき、楽しんでいます。
- 吉野 誠次 人を知り、長崎の歴史を知ることは、今後を豊かにする。
- 若杉 昭子 今回初めて参加しました。長崎の歴史が理解できました。

## おわりに

顧問 宮川 雅一

当新長崎市の史跡探訪塾においては、出島事始め塾、長崎の歴史再発見塾を継承しながら、平成の市町村大合併によって成立した新長崎市全体を視野に、新たに加わった旧町地域や中央部から遠距離にあるエリアに焦点を当て、そこに特有の貴重な歴史・史跡やそれらと長崎中央地域の歴史との関連などについて、現地調査を中心とする研究活動が、50名を越すこれまでにない多くの塾生によって、2カ年間、熱心に展開されてきました。

そのうち今年度でいえば、旧外海町、三重・式見、琴海、茂木、福田の各エリアにおいて、各地に広がるキリシタン史跡や墓地、番所・台場などの長崎港警備施設跡、神社仏閣教会、中世以前の城址、街道、無形民俗文化財、天然記念物、民話、特産品そして新しいところでは池島炭鉱、新三重漁港、あぐりの丘、三京クリーンランドなど多彩な分野が研究対象となり、研究成果が当報告書に纏められています。

これに、昨年度報告済みの三和、野母崎、香焼、伊王島、高島の各エリアの研究活動を合せ一括するとき、客観的にいって、かなり充実した研究成果が挙げたと自負することができます。このことを、大所帯となった当塾の円滑な運営に努力された田端光男塾長、平川辰興・眞野正行の両副塾長そして庶務を担当された石橋久美子氏をはじめ班長・塾生の皆さんとともに、率直に喜び合いたいと存じます。

なお、調査研究の結果で実感したことを、簡単に箇条書きにしますと、次のとおりです。

- 1、それぞれのエリアには、長崎中央地区が迎った歴史にはない、独特の歴史があり、それらを教える史跡・史料・伝承・民話が、今も数多く残っていること。

- 2、特に、これらの対象エリアでは、長崎開港以前の縄文時代にまでも遡る貴重な歴史・史跡に、より多く触れることができること。

- 3、長崎開港以後においても、対象エリアには大村藩領・佐賀藩領の地域が多くあって、幕府直轄領の長崎中央地区とは異なる歴史を刻み、その文献が現地のほか市内外に存在すること。

- 4、しかもこれらの各エリアが長崎中央地区や他の近隣エリアと相互に複雑に影響しあって歴史が展開していること。

- 5、特に、対象エリアの各地にキリシタン盛衰の歴史とそれと影響しあう形で推移した神社・仏寺の歴史があること。

- 6、また、海岸に面する各地には、長崎港警備のための番所・台場などの歴史・史跡が広範にしかも数多く見られること。

- 7、対象エリアにおいて、史跡はもとより、無形民俗文化財、天然記念物などのなかには、市町合併によって、これまでの町という身近な保護者を失い、消滅の危機に瀕しているものが見られること。

今回のこの長崎伝習所塾活動は、伝統ある「長崎学」が、市域の拡大を機会にさらに飛躍することを意図したものであり、このような「長崎学」の展開・進化のなかで、対象エリアの貴重な文化財が適切に保存活用され、あわせて拡大した新長崎市の市民が一体感を共有して、輝かしい未来に向けて新たな歴史を協力して刻むことを願っています。

できれば、この種の活動が、新たな観点に立ってさらに継続されることを念願し、市民各位のご理解・ご尽力と長崎市ご当局のご指導・ご支援を心より切願いたします。

## 新長崎市の史跡探訪塾

塾長	田端 光男				
1	浅岡 哲人	21	白地 和幸	41	本多 正人
2	天野 一朗	22	白地 弘奈	42	松本 淳美
3	石橋 久美子	23	城田 征義	43	松本 育子
4	石橋 義孝	24	富永 則子	44	眞野 正行
5	泉田 正和	25	富永 緑	45	三ヶ島 正彦
6	泉屋 郁夫	26	朝長 初巳	46	三丸 正紀
7	井手 勝摩	27	中島 忠	47	宮川 雅一
8	石見 アヤ子	28	永田 たくみ	48	宮崎 健
9	衛藤 毅	29	長門 ヤス子	49	宮田 一美
10	大木 司郎	30	西本 浜路	50	村崎 春樹
11	小方 みどり	31	橋本 勇男	51	八木 久雄
12	小畑 俊夫	32	原口 和代	52	山下 富久美
13	梶山 定子	33	原田 博二	53	横山 精士
14	鞍田屋 紘司	34	日宇 孝良	54	吉野 誠次
15	小石 文子	35	平田 政秋	55	若杉 昭子
16	小嶺 昭典	36	平山 次男		
17	小峰 則光	37	藤田 孝		
18	桜井 蓉子	38	藤田 祐子		
19	佐藤 眞一	39	藤丸 清子	事務局員	文化財課 豊 美弥子
20	下田 尚昌	40	細川 敏明		